

第6学年 体育科の実践

1. 単元名 ボール運動 「ティーボール」 (全8時間 本時5時間目)

2. 単元目標

◎簡易化されたゲームで、ボールを打ち返す攻撃や隊形をとった守備によって攻防を楽しむことができる。

○協力公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。

3. ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」

手だて…子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり

ブロックテーマ「仲間への共感、自立する自分」

・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿。・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿。

相手意識を持って他者と接し社会性を育みはじめる6年生となり、他とのかかわりの中で互いを認め合うことがますます重要になってきた。しかし、年度当初は思春期の入り口にさしかかっているためか、なかなか話し合いが活発にならなかった。そこで、ペアやグループでの話し合い活動を、色々な学習場面で意図的に設定し、関わり合う経験を積んできた。相手の考えに傾聴することを繰り返し指導した結果、安心して意見を言うことができる雰囲気ができつつある。また、こうした状態を心地よく感じている児童が増え、関わり合うことができる土台もできつつある。これまで終始一貫して「つなげて考えを深めよう」を指導のポイントにしてきた。

体育の学習では、運動が得意な子も苦手な子も運動に親しむことができるよう、個人差を認め合える雰囲気づくりを心掛けてきた。個人差はあって当然なので、作戦を考えたりルールを変更したり場を工夫したりすることで個人差を吸収してきた。みんなが運動とよい関係が持てるよう相手意識を持ち、一人ひとりがマナーを身につけ、お互いを尊重しながらスポーツを楽しむ姿をひびきあいの姿として取り組んできた。

4. 単元と指導について

①単元について

この単元は学習指導要領のE ボール運動(ウ)を受けて設定した。

E ボール運動

(ウ) ベースボール型

◎止まったボールや易しく投げられたボールを打ったり走塁をしたりして攻撃し、また、それを阻止するために捕球したり送球したりして、攻守を交代するゲームをすることを楽しむ。

○得点を取るための出塁と進塁ができ、また、チームとして守備の隊形をとってアウトにする動きができるようにすることでさらにゲームを楽しむことができる。

これまでベースボール型の学習は、4年生の時に「ティーボール」を行ってきた。学

習前のアンケートでは、バットやボールが思うように操作できないなどの理由から苦手意識を持つ児童がいる。反面、バットでボールを遠くへ打って得点へつなげたり、チームの仲間と協力して作戦を立てたりする楽しさや、技能ポイントが分かった喜び、学び合いによる仲間意識や技能向上に対する喜びを楽しんでいると感じる児童もいる。しかし、技能面や思考・判断面においては、運動能力や経験による個人差が大きい。また、攻撃と守備では、守備側の動きに課題を感じている児童が多いことが分かった。

本単元では、子どもたちの実態や学習に対する願いを考慮したうえで、運動に対して苦手意識をもっている子どもを中心に、ベースボール型に対する面白さや、共に学び高め合うよさをさらに味わわせていきたいと考えた。そのために以下のような手立てを考え指導にあたった。

②指導について

〈切実な問題〉

個人差を認め、今持っている力で児童が運動を楽しむ体育の学習をめざすために、個の実態に応じた指導を心がけてきている。その中で、それぞれの児童のめあてが達成されれば、児童は喜び、運動することの楽しさの一つになる。また、それまでの過程で、いろいろな人や場とかかわることも、運動の楽しさの一つである。運動の特性にふれられる単元の学習が成立していれば「ティーボールはこういうところが楽しい」と、実感できるであろう。ティーボールの楽しさにふれる中で技能が高まれば、「もっとうまくなりたい」「もっと勝ちたい」という意欲も高まり、次のめあてを自ら見だし、運動をさらに続けるようになるのではないだろうか考えた。

このような学習の広がりや深まりが、個々の児童の切実な問題であると考え。単に活動を楽しむだけではなく、あくまでも個に応じた適切なめあてを持ち、課題意識を持って学習に取り組み、その解決のために具体的に思考し、工夫を重ね、様々にかかわりながら動きを高めていく児童の姿が見られる学習を通して、切実な問題に気づき自分の高まりを実感できる学びをめざしたいと考える。

《ひびき合いについて》

ひびき合う子どもたちを目指すために、ひびき合える土壌づくりを行ってきた。個人差を認めることでマナーを身につけたり、仲間同士で意図的に学びあったりかわりを意識してきた。また、個人差を吸収するためにチームの作戦を立てたり、ルールを変更したり運動の特性に触れさせながら考えてきた。本時は対抗戦であった。これまでの学びを生かし、自分のチームや相手チームの特徴を考えた作戦を立て、「〇〇ちゃんはレフトによく打つから守備はこれがいいね」「〇〇チームの守備がいないところへ打ってみよう」「よし、今日は作戦がうまくいったぞ。負けたけど少しずつチームになりつつあるな。」「相手は強かったけど、だから僕たちもうまくなれるんだ。」と心の変容が起きた時をひびき合いの姿としたいと考えた。

5. 単元構想

6年 体育科「ティーボール」(8時間)

単元目標

- ◎簡易化されたゲームで、ボールを打ち返す攻撃や隊形をとった守備によって攻防を楽しむことができる。
- 協力公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。

チーム編成をしよう

- ・班長を立候補して決めよう。
- ・ノミネート方式でもいいね。

平等性（勝敗の未確定性）があり、子ども達が納得したチーム編成ができるようにする。

- ・Tボール早くやりたい。・ボール運動は得意だから楽しみだな。
- ・わたしは苦手だな、当たると痛いし、打てないと何かわられるし。
- ・運動は得意じゃないからあまり気が乗らないな、ルールも難しそうでよく分からなかったらどうしようかな。

試しのゲームを行いルールになれよう①

- ・ルールは何となく分かったぞ。・簡単なルールだから私にも得点がとれてうれしいな。
- ・これならできそうだな、バットもボールも自分で選べるからいいね。

易しいルールになるよう工夫したり、用具を選択できるようしたりして、児童が運動を楽しむことを阻害する要因を排除する。

ねらい1 リーグ戦を行い真剣勝負を楽しもう②③④

- ・勝ったからうれしい。・作戦がうまくいくと気持ちいいね。・負けたけど作戦通りにできたから楽しい。
- ・遠くまでボールが飛ぶと、すかっとして気持ちいいね。・初めてアウトにできて楽しかった。

相手をリスペクトして真剣勝負をし、マナーを身につけることができるような声かけをする。

- ・相手に馬鹿にされたからつまらないや。
- ・始めと終わりにあいさつをすると気持ちいいね。・「ナイスプレー」と言われるともっと楽しくなるよ
- ・だんだんルールになれてきたけど、なんか物足りなくなってきたな。
- ・ルールを変更しよう。
- ・もっとうまくなりたいな。

真剣勝負の楽しさが飽和状態になってきたら、ルール変更を子ども達と相談して決める。

ねらい2 力が同じくらいのチームと対抗戦を行いチーム力を高めよう⑤（本時）⑥

- ・相手チームはだれがいるのかな。○○さんは打ちそうだな。
- ・いつもレフトに打っているよ。レフトの守りを固めよう。
- ・自分たちのチームは守りがいいから、先に点を取れば勝てるな。
- ・少しずつうまくなってきたから、いろいろなチームとまた対戦したいな。

相手チームの特長を知り、自分たちのチームの特長を生かした作戦を立て、ゲームを楽しむことができるように支援をする。

もう一度いろいろなチームと対戦しよう⑦⑧

- ・今日は作戦がうまくいったぞ。負けたけど楽しかったな。
- ・チームが一つになってきたぞ、明日からもこの仲間達と一緒に生活したいな。

マナー面や学習の仕方などで全体に広げたいところがあれば、必要に応じて取り上げる。

6. 本時展開

(1) 本時目標 力の合ったチームと対戦を行い、相手チームや自分のチームの特長を考えた作戦を立て、ゲームを楽しむ。
(2) 本時展開

学 習 活 動		指導上の留意点・評価
同じくらいの力のチームと対戦をする ○ゲーム1 3回までの試合を行う。 ○チームの時間 ゲーム1を振り返って作戦を考えたり、チームの力を高めるために、練習したりする。 ○ゲーム2 ゲーム1やチームの時間の話し合いを生かして、ゲーム2を行う。 雨天時 場所 アリーナ ス テ ー ジ ○コート (Dコート) ○コート (Bコート) 校 舎	Cコート 黒対黄 Bコート 青対緑 Dコート 白対橙 Aコート 赤対紫	・コート設営や準備を協力して行い、真剣勝負をする土壌を作る。 ・チームの時間を大切に、いろいろな考えを認める雰囲気大切に作る。 ・自分たちのチームの特長や相手チームの特長を考え、作戦を立てられるようにしていく。 ・相手を尊重してゲームを行うことを大切にするため、マナー面で気づいたことがあれば声をかけていく。 ◇今持っている力を精一杯発揮し、仲間と関わり合いながら活動に取り組もうとしている。【関心・意欲・態度】 ◇自分のチームや相手チームの特長をどう考え、それに合った作戦を考えている。【考え方】

7. 実践を終えて

「個人差を認める」様々な工夫や手立てにより、子どもたちの後ろ向きな思い（恥ずかしさ・苦手意識など）が学習を楽しもうとする姿へ変容してきた。子どもたちが各教科の学習そのものと良い関係をもち、教科の特性に触れることを通して仲間とかかわることの喜びや楽しさ・自分の持っている力に気づき、学びながら自己に問い、他を思い、人間のすばらしさを互いに感じ合うことを大切にしてきた。

そして、教師は圧することなく、自発的、自主的に、伸びやかに自己開発する児童の姿を願い、期待し、日々の授業づくりを行ってきた。このような、地道な取り組みから、「子どもたちの好ましい人間関係や子どもと教師との信頼関係が確立し、学級の雰囲気もあたたかく、子どもたちが安心して、自分の力を発揮できるような場」が、できてきて、子ども一人ひとりの一歩、子ども一人ひとりの笑顔を大切にする学級につながっていくと考え実践してきた。

この考えを学級経営の基盤に置き、今回の提案をしてみた。今回は「ティーボール」という体育の単元であったが、どのようにひびき合い高め合っていけるのか悩み試行錯誤してきた。以下のような成果が出てきつつある。初めは、自分が中心で、相手のことまで考えられる児童が少なかったが、振り返りの中で友だちが困っていることをみんなで話し合ったり、頑張ったことをお互いに認め合ったりしていくことで少しずつ子ども達の意識が変わってきた。マナーを身につけ、相手をリスペクトすることで気持ちよく運動ができることに気づいていった。それを繰り返すことによって、「伝える」から「伝え合う」へ、それが「学ぶ」から「学び合う」へと単元を通し学習に臨む態度が変容していった。

教師が声かけをする際に児童に課題を解決するための視点を与えることで、めあての質が変わってきたが、課題にぶつかったときに、再度チームのめあてを確認させることができなかった。局面に目を向けさせ、めあてに返って考えることで課題解決につながるようにしていきたい。それが子ども達にとって話し合わなくてはいけない必要感となり、かかわりの中で解決していく姿をめざしてこれからも研修を続けていきたい。